

第39回学術大会を終え、来年に向けて

江端 清和

公益社団法人日本診療放射線技師会 業務執行理事

第39回日本診療放射線技師学術大会が9月29日から10月1日までの会期で熊本城ホールにおいて開催されました。30th East Asia Conference of Radiological Technologists (EACRT) も併催され、埼玉大会以来の対面での情報交換会も大変にぎやかに開催されました。全体で2千人を超える参加者登録があったと伺っております。西小野大会長をはじめとした熊本県放射線技師会会員各位の絶大なるご協力があったからこそこの盛会であったと強く感じました。10月10日から11月27日までの期間での学術大会オンデマンド配信では、11月に入っても視聴登録をされる方が多くいらっしゃいました。興味を引く企画が開催されたことの証左と思われますとともに、企画・運営をされた大会実行委員各位に厚く御礼申し上げます。



オンデマンドが大変好評であることは、聴き逃したセッションを後で聴けるというメリットもありますが、現地参加できない会員にとっても大変好ましいシステムであると考えています。会員各位の勤務施設によっては、学術大会に参加を希望しても勤務体制上、出張困難なご施設も多いかと思います。JART会員の中には、交通の便があまり良好ではない勤務地の方々もおられるかと思いますが、私自身も以前は交通過疎地で勤務しており、移動には大変苦労しました。

会員の皆さまに新しい情報に触れてもらえる機会をつくっていくことは、JARTの大きな役割と考えております。JART事業の情報発信は地域間格差を感じないことを目指しています。その一環として、分科会や委員会の協力の下に来年度以降も講習会・イベントのWeb開催を進めさせていただき、かつ可能な限り参加費用も抑えられるよう議論を進めさせていただきます。また基礎的講習会や他団体の有用な情報なども、会員は無料で視聴できる環境構築の検討を進めています。われわれの職種は、卒業してからも新しい情報の収集と習得が必須の職業ですので、そのために役立つ情報システムであるべきだと考えています。

熊本学術大会の会長講演で「JART Vision 2040」が紹介されました。2040年の診療放射線技師と日本診療放射線技師会のあるべき姿が目標として示されましたが、すでにその目標に向かって動き始めています。年度内に診療放射線技師の需給と画像診断検査件数との将来予測に関する報告書が提出されることになっており、これを受けて来年度では具体的な事業の展開を進めていく予定です。

診療放射線技師には各種検査だけでなく、放射線安全管理、被ばく管理、医療安全に関わる業務も課せられています。関係省庁や関係団体との折衝や情報共有・意見交換などを経て、われわれの職種が国民と他の医療関係職種にとってなくてはならない職業であり続けるための議論を進めていますが、多くの場面で政治的働き掛けも必要です。現在、本会会員である哇元衆議院議員のおかげもあり、「ラジエーション知識を普及させ安全利活用を推進する議員連盟（略称ラジエーション議連）」と、「国民に最善の医療を届けるために診療放射線技師を支援する議員連盟（放射線技師議連）」の議員連盟が活発に動いています。

タスク・シフト/シェアや診療報酬、医療安全や災害対策、検査説明やSTAT画像所見報告など、他職種や政策に大きく左右される課題は山積しています。あっという間の一年が過ぎようとしています。今年できることは今年のうちに、来年すべきことはしっかりと種をまいて花が咲くように努めてきたつもりでいます。学術大会で得た知識を糧に、まだまだ成すべきことは多いですが、着実に前へ進みながら新年を迎えたいと思います。

皆さまにも実り多き一年であったことと思いますが、来年もさらに大きな花が咲く一年になりますことを祈念します。